

感謝の辞

山上達人先生が2003年3月末日をもって奈良産業大学を退職されることになった。先生は大学そして学部を代表する存在であった。特に経営学部にとっては「学部の生みの親」であり、我々は特集号を編纂することによって先生に対する感謝の念の一端を表すことにする。

研究者としての先生の歩みは私がここであえて紹介するまでもなく学界では周知のことであるが、別掲の「業績目録」を拝見させていただいて先生のお仕事が量・質ともに群を抜いていることを改めて再認識させられた次第である。先生の研究には、私なりに理解すると、「基本的なこと(本質・原理・原則)」を重要視しそれをベースとして時代の要請に誠実に積極的に応え現実の諸問題に総合的に対応できるように体系的な研究をする、という姿勢が一貫して流れている。先生の最近の論文に次のような一節がある。「企業は『個別的存在』としての側面と『社会的存在』としての側面をもつ『二面的』な『矛盾』の統一体である。……環境会計は、宿命的に、これらの二律背反的な特質をもつものであり、『地球環境的問題』と『企業利益問題』……を混同してはならず、他方、峻別しながらも、これら両者を提携させて、並列的・複眼的に体系化することが重要である」。このような視点は、ビジネスと倫理という相容れない存在を結びつけているとの批判のなかで学問的正統性の獲得を志向してきたビジネス・エシックスを研究している私には含蓄に富むものであり、これまでも先生の発想に勇気づけられことが多かった。

先生の「すごさ」は自説を理論的に展開しただけでなく実践し行動に移したことにある。日本社会関連会計学会の創立がそれである。そしてその第15回全国大会が2002年10月に奈良産業大学で開催された。しかも統一論題のテーマは「環境会計の体系化を考える」であった。私も拝聴させていただいた。学会を代表する4人の論客の報告には先生の説が多く引用されていた。しかも参加していた会員のなかに若い会員の姿が多数見うけられ、若い世代の研究者が着実に育っていることを確認でき、先生の努力がここでも実を結んでいることを自分の身体で理解することができた。忙しそうに動き回られていた先生の後ろ姿から「充実感」を感じ取ったのは私だけではなかったことであろう。

このような研究姿勢は学部の運営にも適用された。70才を過ぎたら「山上会計学」の体系化に専念したいとおっしゃっていた先生があえて再度行政職に戻られ新学部設立の先頭に立たれ初代経営学部長として学部の基礎作りに尽力してくださったことには「教育者としての責任感」も大きく影響していたのであろう、と感謝している。新学部の教育方針は次の時代を背負う若者に経営(学)の基礎知識を教えると同時に変動する時代に敏感に反応できる感性を養うことであった。経営の主要領域に「企業と社会」に関連する科目を配置したことはそのような意図からであり、カリキュラム的には他大学に優るとも劣らぬ陣容で学部をスタートできたことを我々は誇りに感じている。少子化で大学はこれまで経験したことの無いような時代に突入せざ

るを得なくなったが、我々は今後たとえ形態は変わったとしてもそのような創設時の意図を肝に銘じそれを具体化するような方向で学部を運営していきたいと念じている。

先生は漢詩にも造詣が深く、多くの作品を公表されている。節目ごとに詠まれた作品の一部は我々にも理解できるように詳細な解説を付けて披露して下さった。例えば、経営学部長室には学部創設に際して詠まれた「賀学部創設」が掲げられており、先生の後を引き継いだ私は悩み疲れたときその25文字を声に出して読み、自分を鼓舞してきた。多分、今後就任する学部長たちも同じことをするのではないだろうか。退職に当たっても詠まれると思うが、どのような作品を読ませていただけるのか、楽しみでもあると同時に寂しさも感じており、複雑な心境にとらわれている。

最後になったが、先生そして先生のご家族の皆様方のご健康を心から祈念する。

2002年12月25日

経営学部長 宮 坂 純 一